

おわりに

1月13日(水)、14日(木)、南国鹿児島も4年ぶりの積雪になりました。園門周辺を雪かきし、園児を迎えました。園庭は、真っ白の銀世界になっています。

登園してきた子どもたちは、「わあ、真っ白だ」などと歓声をあげながら大はしゃぎです。早速、友だちや保育者を誘って雪一面の園庭に走り出します。雪を投げたり、転がしたり雪うさぎや雪だるまをつくったりして遊びました。園庭を歩くと、ぎゅっ、ぎゅっと音がします。あまり聞き慣れない音にも出会いました。口に入れて雪の食感を確かめます。「かき氷の味がした」「口の中が冷たい」などの会話が聞こえてきます。

雪だるまつくりの子どもたちがいます。最初は数人で転がしていましたが、大きくなるにつれて転がすには力がいらいます。友だちを呼んでいっしょに転がそうとするが重くて転がりません。とうとう保育参加している保護者にも応援を頼み、自分たちの背丈よりも大きな雪だるまを完成させました。雪の重さの実感や協力することの大切さも味わったようです。

年長児の女兒が「段ボール持ってくる」と言って、保育室にある段ボールを取ってきました。築山の斜面を利用しての遊びを思い付いたのです。段ボールをお尻に敷いての段ボールスキーを楽しむ計画です。いざ始めると、この遊びが大人気。スピード感溢れるスリル満点の滑りが子どもたちの心を掴んだようです。

「先生、手が痛いよう」と、泣きべそをかきながら保育者に訴える年少児もいました。雪遊びをして濡れた手の冷たさが痛さにかわることに気付いたようです。また、雪混じりの水の中に雪を入れると、すーっと雪が消えていく不思議さにも出会いました。

雪をコップに入れ、絵の具シロップをかけてかき氷つくり熱中する子どももいました。おいしい白熊がたくさん出来上がり、友だちに振る舞う姿も見られました。

このように、子どもたちに今回の雪との出会いだけでなく、いろいろな自然と直接出会い、感動する体験を多くさせることは、自然に対する畏敬の念や愛情だけでなく科学的な見方や考え方の芽生えを培う上でも大きな意味をもっています。

そのために、本年度は、「自然」とのかかわりを通して自分らしさを発揮するために《保育者の援助の在り方》や《環境構成の工夫・改善》等について研究を進めて参りました。本日の公開を通して皆様と一緒によりよい保育の在り方について考えていけたらと思います。

さらに、本年度は、事例をたくさん取り上げ、一つ一つの事例に対しての援助の仕方や環境の工夫、併せて、期ごとに園内のどこで、どのようなかかわりをしたのかを写真を使ってまとめてあります。各園でも、それぞれの園における自然を生かした遊びの研究等に活用して頂けたら幸いに存じます。

皆様にとって、本日の公開研究会が実り多いことを御祈念いたします。

平成22年2月5日

副園長 石原 義仁

研究同人

園長 今林 俊一
教諭 味園 佳奈
教諭 梁瀬加那子
講師 松野下倫代
講師 東山崎優実

副園長 石原 義仁
教諭 永吉由紀子
講師 坂元久美子
教師 鳩宿恵理香
教諭 内田 真紀

旧同人

講師 谷山 佳奈
講師 山口 尚子

講師 成川 梨恵